虎次郎の「秋」に不思議な白

吉備国際大教授
下山進氏

「没後70年・児島虎次郎展」が故郷の成羽町美術館を1999年10月にスタートして全国7会場を巡回し、大原美術館でフィナーレを迎えようとしていた2000年12月11日。私は幻の名作「秋」が展示されている同美術館で非破壊分析調査を行いました。この油絵は、97年8月にパリ国立近代美術館を訪問した虎次郎のお孫さんの児島塊太郎氏（陶芸家、倉敷芸術科学大学教授、加計美術館館長）が初めてその存在を確認したもので、虎次郎が1920年にパリのサロンに出品し、フランス政府が買い上げた作品です。79年ぶりに日本へ里帰りし初公開されました。

児島虎次郎（1881～1929）「秋」1920年、200×136㌢、ポンピドゥーセンター・国立近代美術館蔵

◆目引くソックス

調査の前日、私はこの「秋」を来館者と一緒にじっと観察していました。チマ・チョゴリを装い、花園の中に立つ韓国の少女の白いチマ（スカート）から、しだいに目を落としていくと、天空からの強い太陽光を受けて明るい白色光が全反射しているように真っ白なソックスが描かれています。「この白だ！」と思いました。大原謙一郎氏（大原美術館理事長）の目を引きつけたのも、この「白」だったのです。実は、大原理事長が調査を私に依頼する時、「児島虎次郎は洋画のみならず日本画も描いている。あの白は不思議な白です。日本画で使用する白色顔料の胡粉（ごふん）ではないだろうか？」と言われたのです。

◆日本画の技法

油絵の主な白色顔料には、鉛白（主成分は塩基性炭酸鉛）、亜鉛華（酸化亜鉛）、チタン白（酸化チタン）などがあります。これらは、植物性の乾性油で溶いて絵の具として使用します。一方、日本画の白には、胡粉（炭酸カルシウム）が主に使われ膠（にかわ）水で溶きます。もし、この花園に立つ女性の真っ白なソックスに胡粉が使われているとすれば、日本画の技法にしたがって膠で溶いて描いたはずです。乾性油で溶くと、屈折率が油に近い胡粉は、半透明となりカバー力（隠ぺい力）を失いキャンバスの下地が透けて見えてしまうからです。

◆検出された元素

翌日の休館日、調査を実施しました。調査に用いたのは前回ご紹介したラジオアイソトープを利用するポータブル非破壊分析装置（蛍光X線分析装置）です。キャンバスに塗られている絵の具から放出されたエネルギーを計測することによって元素を割り出すことが出来ます。もし、胡粉であればカルシウム元素を検出することになります。しかし、あの真っ白なソックスからカルシウムは確認されず、亜鉛元素だけが検出されたのです。このことから、真っ白なソックスは亜鉛華のみを使用して描かれていることが分かりました。

大原美術館の展示場で「秋」を分析調査する筆者

◆膠で溶いた？

亜鉛華は、チャイニーズホワイトとも呼ばれ中国の磁器「白磁」を思わせる透明感の強い白です。しかし、描かれているソックスは、透明感が乏しく黄変もしていません。真っ白な不思議な白です。亜鉛華を膠で溶けば、透明感が薄れることが考えられます。また前回、ルーベンスの「ゾドムを去るロトとその家族」に人造の青色顔料「スマルト」が使われていることを紹介しましたが、ルーベンスはスマルトを膠で溶いて使用しています。スマルトは、乾性油を使用すると、その使用量が多いほど黄変による影響を強く受け、青色の色調が失われてしまうからです。

虎次郎は、亜鉛華を使用するさい、日本画の技法を取り入れ、膠で溶いてソックスを描いたのではないか？　しかし、残念ながらそこまでの調査は出来ませんでした。自然と人間の見事な融和が描かれた「秋」は、当時の図録でしか見られませんが、再び里帰りするのを待つばかりです。

きび談語

国体秋季大会開幕まで10日を切りました。私が取材を担当する備前市では、テニス競技が開かれます。選手の民泊を受け入れる市の協力会の活動を記事にし、改めて選手の懸命なプレーだけでなく、支える側の尽力があってこそ競技が成功するのだと実感しました▲私は高校時代、テニス部に所属していましたが、国体は、口にするのもおこがましいほど遠い存在でした。国民的関心は低いとは言え、競技者にとってあこがれであり、目標の一つであることに変わりはないと思います▲あの当時、同年代で名の通った選手の名前が、岡山国体出場選手の中に記されているのに気づきました。期間中、一度でも会場に足を運べばと思っています。

【佐藤慶】